

刻む会 たより



93.3.6

第2次来日
歓迎特集



No.7

建議 書

山口県知事殿

長生炭鉱犠牲者大韓民国遺族会長

- 一、山口県の無窮の発展を祈願します。
- 二、一九四二年二月三日、県の宇部市所在長生炭鉱に於いて水没事故にあい五一年が過ぎ、いままで犠牲者遺家族に対し日本政府側で無誠意な状態に怒りに思い、ふたたび長生炭鉱水没犠牲者、朝鮮人一三二名を代表して大韓民国遺族会員一同は次の事項を促求しますので、善処を願います。

次

- 一、長生炭鉱埋没地に水葬された遺骨を故郷の地に安葬するようにせよ。
- 二、長生炭鉱犠牲者に対する資料及び事物を一切公開せよ。
- 三、長生炭鉱犠牲者を追慕するために追慕碑を建立し、追慕碑の内容に日本政府の公式的謝罪のことばを記載し、犠牲者の名前を全員記載せよ。
- 四、長生炭鉱犠牲者遺族が追慕祭を捧げるよう、社を建立せよ。
- 五、長生炭鉱現場に残存しているピア（換気筒）を永久保存せよ。
- 六、長生炭鉱現場で毎年行う追慕祭に遺族全員参席できるように政府次元で支援せよ。
- 七、長生炭鉱犠牲者遺家族に対し、心的、物質被害を補償せよ。

一九九三年二月一日

韓国からし遺族 を迎えて

山口 武信

長生炭鉱水非常五十一周年追悼集会のため、去る一月三十一日、韓国より金永鉉大韓民国遺族会会長以下十二名の遺族と、足利市などから在日の遺族をお迎えしました。遺族の方々には二泊三日の大変きつい日程でしたが、無事追悼の行事を終わることができました。これも皆様方のあたたかいカンパがあつてできたこと、心よりお礼を申し上げます。

今回来日された遺族の中には、災害当時生まれて間もない方、母親のお腹の中におられた方がありました。市民交流会の席で、災害後の苦汁に充ちた一家の生活について、の血を吐くような言葉を伺いました。今更ながら事の重大さを思い知らされました。この度は、初日の三十一日夜は柳井武さんのご好意で遺族の方全員を同氏宅に

泊めていただきました。皆さんに日本の家庭を知っていただくよい機会となりました。

二月一日午後、宇部市役所と山口県庁を表敬訪問しました。今回も行政の対応の生ぬるさと、その場凌ぎで熱意も誠意もなく、他県の対応と較べて意識の遅れを見せつけられました。とは言うものの、十二名の遺族の方々を無視することはできなかつたのか、宇部市では初めて短時間ながら助役が出席しました。金会長は宇部市長と山口県知事に対して七項目の決議文を手渡されました。(別掲参照)このほか、西光寺、西岐波小学校を訪問し、更に遺族の一人洪性淳さんが西岐波小学校五年のときの学級担任の今井孝夫先生を自宅にお訪ねしました。

この三日間遺族の方たちは休む間もない多忙さでしたが、長生炭鉱犠牲者の問題について、日本国内の対応や、刻む会の実情もある程度知っていただくことができましたと思います。この間、残念だっ

たのは、多忙のため遺族と会員の間の話しの時間がほとんどなく、証言としての聞き取りができなかつたことです。また、今回の成果としては南北の垣根を越えての在日の婦人方と日本の婦人方が追悼集会のために、何日も前から協力して集会の準備にあたられたことです。ご苦労も大変なものがあつたことと思ひます。追悼集会にあつては下関市の野村さんのご心配で、桜井葬典社のご奉仕により、天幕や敷物、台などの準備をしていただきました。その上強力なストンプ三台を置いていただき、寒い日でしたのでひとしおありがたいことでした。

チェサ(法事)での孫鳳秀さんの弔辞は私共の胸を締め付けるようでした。しかし、まだ一度も肉親の眠る長生の地を訪れたことのない遺族がたくさんあります。碑に刻むことも、証言を集めることもまだ進んでいません。韓国に渡って証言を集めることも早急にしなければならぬことのひとつです。

市民の理解の輪を広げ、これらの目的達成のための努力を重ねて行かなければなりません。もちろん地元西岐波の人々の協力をお願いしなければなりません。この度井上正人さんから遺族の帰国にあたりお茶とお土産を頂戴しました。追悼集会には鶴田幹雄さん（当時西岐波国民学校六年で洪性淳さんの友人）、交流会には橋高八郎さんが（当時西岐波国民学校三年）が来て下さいました。

関係者、市民が力を合わせて日朝、日韓の間の交流が正しい理解のもとに盛んになり、友好と親善が深められるようにと二日の夕方釜山に向かう関釜連絡船の汽笛を聞きながら心から思いました。



同行記

（一月三十一日（日））

朝七時半、前日より来宇の京都の李元宰さんも一緒に下関にむかう。通訳は金斗元さんをお願いする。名簿通りご遺族十二名を迎えてひと安心。車四台に分散して宇部へ。日曜日なので、希望者は在日大韓キリスト教宇部教会で礼拝を守り、他の人はまず事故現場に案内するという予定であったが、なぜか全員が礼拝に出席。居眠りをしておられた方もあったとか。船旅の疲れであろう。

昼食を「じゅうじゅう亭」ですませてから事故現場に案内する。テレビ山口の人が待っておられた。事故当時西岐波国民学校生徒であった洪性淳さんや山口武信さんから当時の模様を聞く。一同感無量。取り壊された巻き櫓の残骸に上がったりもしておられた。

しばらくして、持世寺温泉にお連れする。金有復さんは腹痛で入浴できず横になっておられた。

夜六時より、厚南隣保館で、夕食を共にしながら会員との交流会。弁当と鍋を囲む。参加者四十三名。お互いに自己紹介、一言ずつ語ってもらう。金永鉉会長が、前回八月に金東岩さんと来宇しての帰りの船中、自分達はこうして国に帰ることができているが、犠牲者は未だに海底に眠ったままで再び故里に帰ることができなかったことを思うと涙が溢れて仕方がなかったと言われた。今回来日のご遺族は、息子八名、孫一名、甥三名である。内、父親が死亡したとき、母親のお腹にいた人、生後間もない人びとがいた事が心に残った。韓国の女性は再婚をしない人が多いと聴く。若い妻たちは夫を亡くし、小さい子供達をかかえてどんなにか苦勞されたことかと思うと胸がつまった。

この日は、厚南の柳井武さん宅に全員民泊。きくところによると遅くまで第一頁掲載の「建議書」作成のために皆で協議会をしておられたとか。



〔二月一日(月)〕
午前十時、犠牲者の位牌のある西光寺へ。住職さんが位牌を出して待っていて下さった。ご遺族は

位牌を胸に記念撮影。

西光寺から西岐波小学校へ。校長宅で当時のアルバムや卒業生名簿を見せて下さるが、学籍簿は焼却処分にしたとか。一次資料がなくなつて誠に残念無念

当時洪性淳さんの担任だった今井孝夫先生が近くに住んでおられるとの事、そちらに回る。五十年ぶりの再会であるがお互いによく覚えておられ、洪さんが「先生のたばこをよく買いに行きました」と言うのと、今井先生は「そうだったかなあ」と若干照れくさそう。午後の予定があるので、あわただしく失礼する。

午後一時宇部市役所、午後三時山口県庁行き、金会長が「建議書」(第一頁参照)を朗読して提出、前回訪問の際お願いした事でもあるが、その後どの程度進捗しているかと糾された。宇部市役所の対応者が「この事故は民間企業が起こしたことであり・・・」と言うとご遺族の一人孫鳳秀さんが発言を求められて、当時は民間企業

といえども国策に従って経営せざるをえなかったのであり、国の責任は逃れられない。国の下部機関でもある市の責任は免れることはできないのではないかと言われたのが非常に印象的であった。

夜は六時半より宇部市総合福祉会館で、ご遺族との歓迎交流会。参加者はご遺族を含めて約五十名。日本人参加者が少なく、残念であった。それでも、事故当時、西岐波国民学校三年生の橋高八郎さん（旧姓戸谷）が出席しておられ、事故当日の模様をお話し下さったのは嬉しかった。

この日は、厚生年金休暇センター泊、藤井舒夫先生にも泊まってもらおう。山口先生と私は十一時過ぎ小郡着で栃木県足利市から来られるご遺族鄭武永さんを迎えに行く。鄭さんは犠牲者鄭壬出さんの最近判った「在日」の息子さんである。

《二月二日（火）》

午前十時より事故現場で追悼集会。この日のことは、各報道機関とも大きくとりあげてくれたので、重複をさけて記すと、まず、追悼集会中、雪の乱吹く荒天。天も海底に眠る犠牲者と共に慟哭している様だ。桜井葬儀店のご好意によるストープは有り難かった。チェサ（韓国式の法事）の供物を並べるのは本来男のすることだそうだが、こちらは勝手がわからないし、料理して下さった「在日」のご婦人方が並べてくださる。チェサの中に「弔辞」があったのには驚いた。韓国では通常そうするそうである。孫鳳秀さんが心情をこめて朗読され感動した。文面は別記をご覧いただきたい。チェサの最後がコブシを突き上げてのシユプレヒコールであったことにも驚いた。金会長の音頭で一同、「建議書」の七つの要求を叫ぶ。

海浜での追悼集会を終わって、近くの自治会集会所で、お供え物や別途作った料理を皆で会食。こ



束花に海の恨み 韓国の遺族

の風習は日本の法事と似ている。あちこちで個人的に話の花が咲いていた。この時だけでなくご婦人方には大変ご苦勞をおかけした。心からお礼を申し上げます。

一時過ぎに発って下関へ。領事館訪問。韓国語なので総領事とご遺族の話しの内容は判らないが、市県の対応の鈍さを訴えておられたようだが、総領事は政治的解決の難しさを説いておられたようだ。乗船まで少し時間ができたのでショッピング。四時半から乗船開始。私はその時点で失礼したが、山口、藤井両先生は船が出るまで見送ってくださいました。

ご遺族を迎えての二泊三日間、多くの方々のご協力をえた。とりわけ通訳者としての喪基秀さんの名を記しておきたい。「近くて遠い国」でなくするためにも、ハングルを覚えなければとは思いますが……。



事務局では、今やっと二泊三日間の写真を整理してご遺族各人にアルバムを贈呈した。それについても働き手がほしいものである。次回は犠牲者のお母さんやご夫人をお迎えできないだろうか。聴き書きのために渡韓することも緊急を要する。
(澄田亀三郎記)



韓国式のお参りで父や祖父の靈を慰める遺族



西光寺で犠牲者の位牌を全遺族が胸に

ご参集のみなさま!!!

私は長生炭鉱水没犠牲者大韓民国遺族会を代表して、五十数年前の今日この日、あのすさまじい惨状と悲劇を歴史に告発し、亡くなられた方々の英霊を称えるため、この場にやってみりました。

振り返ってみれば、

日本の帝国主義の被害者はこの長生炭鉱の犠牲者ばかりでなく、私たちの故郷にはいちいち数えられないくらいたくさんいますが、亡くなられた方々を襲った逆巻く歴史の渦はまったくすさまじいばかりのものでした。

なかでもとりわけ胸の痛むことは、祖国大韓民国の国民として生を受けたにもかかわらず、日本の軍靴に踏みつけにされたことであり、それよりももっと胸の痛むことは、強制連行されるか遠い異国の地、この長生炭鉱まで連行されたことであり、さらにそれよりももっと胸が痛むことは、あのような若い年令で、いえ、あのような幼い年令で、まだこれからという一輪の蕾のまま、震えるような冷たい海の底へ没していかれたことです。

このような事実が五十数年が過ぎた今日この日まで隠蔽しようとたくらむ者たちがいるという事実です。

ああ、悲しみで気が遠くなるほどに

ああ、憤りで気がくるうほどに

ああ、悔しくてやりきれぬ

今も安らかに目を閉じることができずにいるあなたがた!!!

あなたが逝かれたその日!!!

一九四二年二月二日!!!

天も号泣し、地も慟哭しました。

あなたが逝かれて半世紀がたちましたが、あなたの遺骨さえ捜し出すことができず、あなたの安息所をふるさとの山につくることができない、親不孝者の息子と孫たちがやっと今日この日、やっとここにやってきました。

あなたが逝かれて半世紀がたちましたが、あなたの命をかけた崇高な遺志をくみとることもできずにいる親不孝者の息子と孫たちがやっとここへやってきました。

あなたが逝かれて半世紀がたちましたが、あなたの胸に悲しくわだかまっている恨（ハン）をはらすこともできない親不孝者の息子、

父よ、祖父よ!!!

許して下さい!!!

やっと気がついたのです。
やっと集まったのです。

これからはひとりで心を悩まして悲しんだりしません。喜びも悲しみもともにわかちあえる兄弟たちが集まったのです。もう寂しくはありません。あなた方がたまらなく寂しかったでしょうこの地にも、これからは春風が吹くことでしよう。

軍靴の嵐が吹いたこの地にも、私たちと同じ兄弟姉妹たちがむつまじく暮らしてきています。

父よ、祖父よ！！

いまなお安らかに目を閉じることのできないあなたがた！！

もはや一握りの土となってしまったでしょう変わり果てたあなたがたの遺骸を、ふるさとの山にふりまくことのできるその日まで、氷のように冷たい海の底ではありますが、あなたがたを愛する息子や娘たちを信じて、どうか辛抱してください。

しずかにお眠りください！！
安らかにお眠りください！！

一九九三年二月二日

長生炭鉱水没犠牲者大韓民国遺族会

代表 孫 鳳 秀 梓

安らかに... 祖父よ父よ

1993.2/3 40

宇部・長生炭鉱の犠牲者

韓国の遺族ら追悼式

昭和十七年二月三日、水没事故で百八十三人(うち当時の朝鮮人百三十数人)が命を落とし、今も海の底に眠る宇部市西岐波の海底炭鉱、長生炭鉱のヒーヤ(排気口)が見える海岸で一日午前十時から、韓国在住の遺族十二人と在日の遺族二人、関係者約五十人が出席して韓国式の追悼式があった。

黙とうで始まった追悼式では、犠牲者の一人、孫長平さんの孫で、この日の式に出席の予定で先月亡くなった父に代わり参加した孫鳳秀さん(三三)が「悲しい。悔しい。恨めしい。今でも静かに眠れない犠牲者たちよ。故郷の地に眠るまで、寒い海の底に眠って下さい」と遺族を代表して、父や祖父や伯父(叔父)をしくした無念を弔辞に表した。

韓国式に花や果物、豚肉や酒などを飾り、海に向か

追悼式を、折からの雪の中で歌った。
昨年夏にもこの地を訪ね、その後結成された大韓民国遺族会(六十二人)の会長を務める金永鉉さん(五三)に合わせて、一日に県と宇部市に届けられた遺骨を、炭鉱近くの西岐波国民学校の卒業生で、遺族の洪性淳さん(五三)は「父が亡くなって五十年以上になるが遺骨もない。あるのは海を眺めて流す涙ばかりだ」と話した。